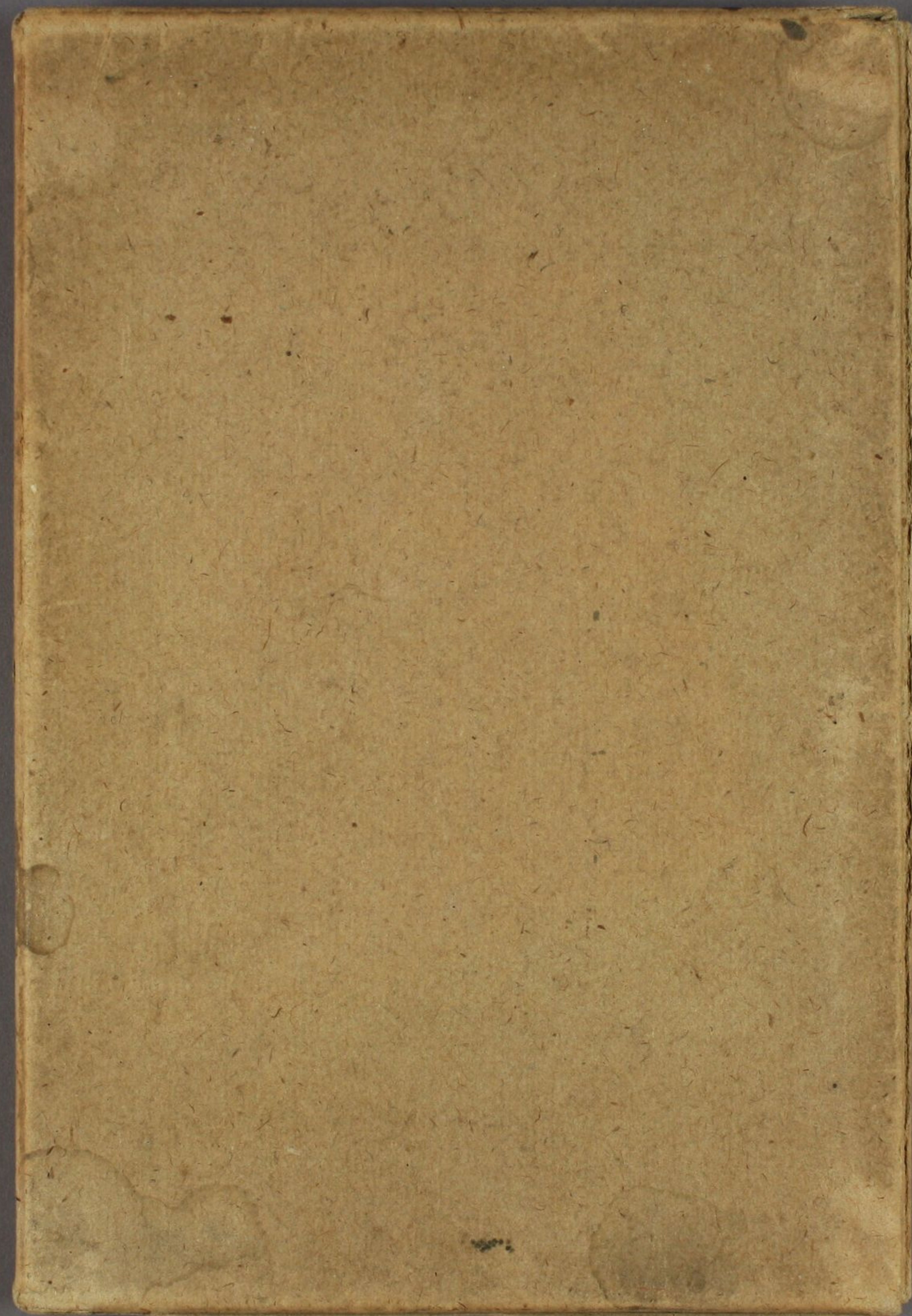


樹

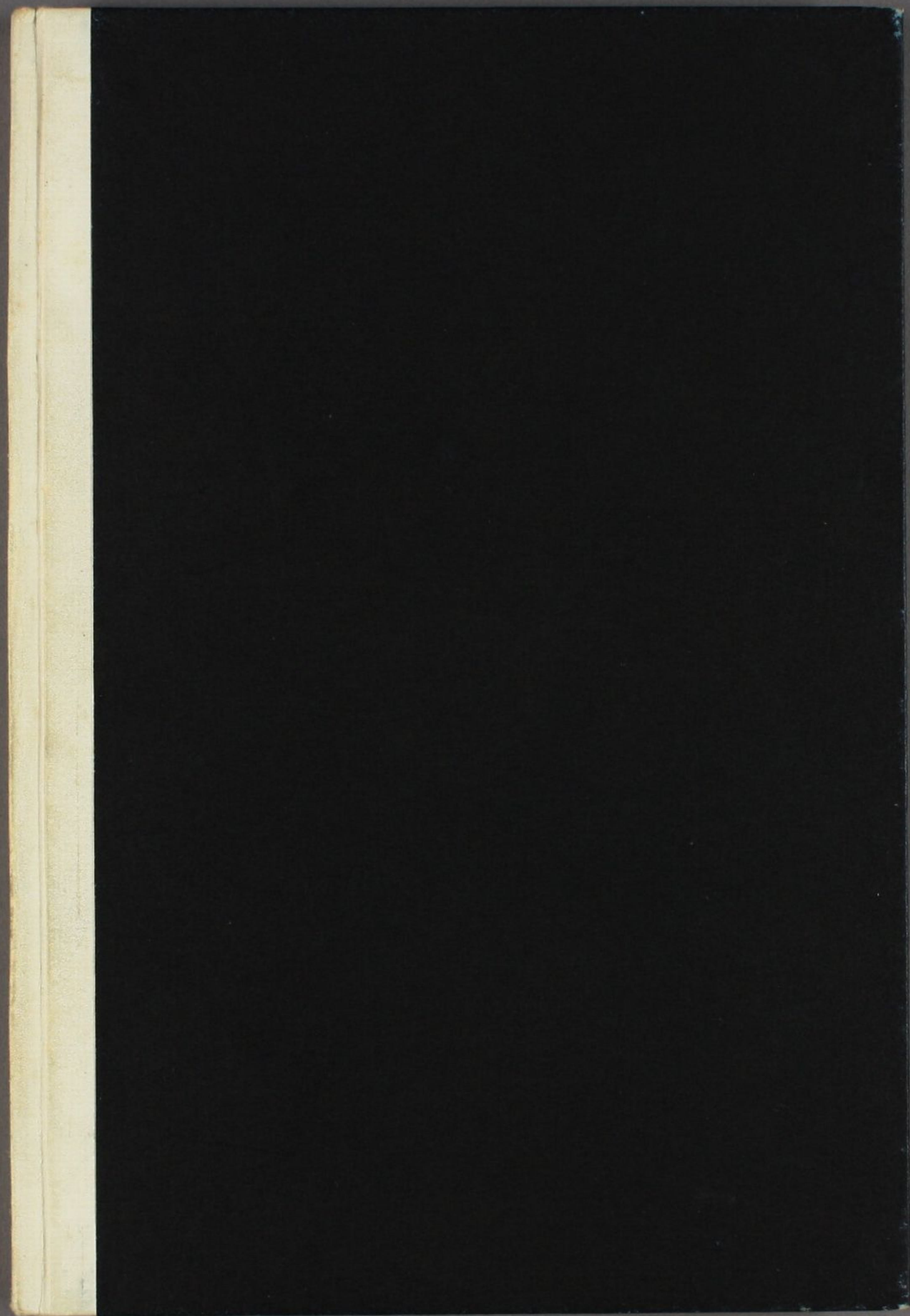
北村
初雄

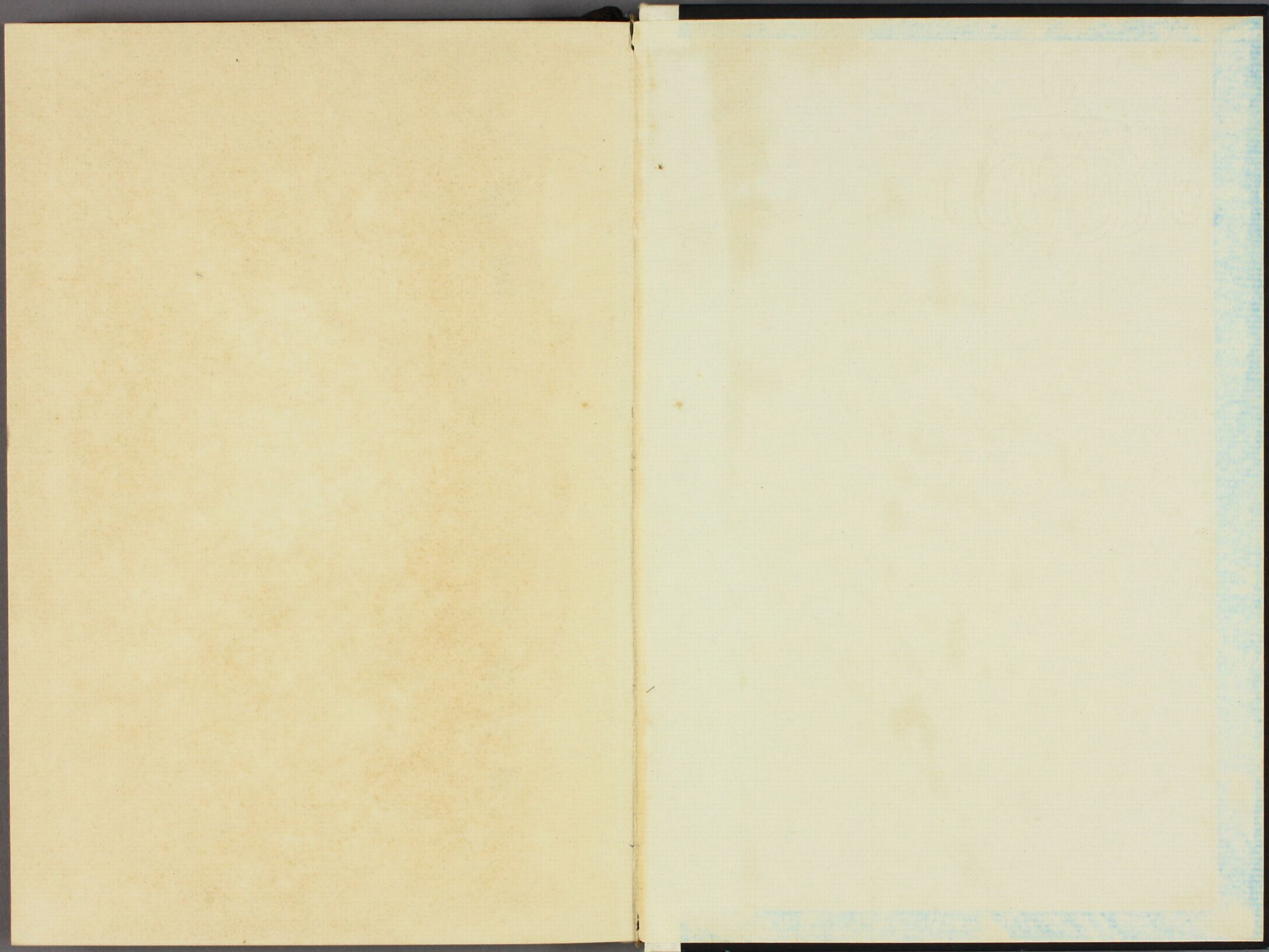


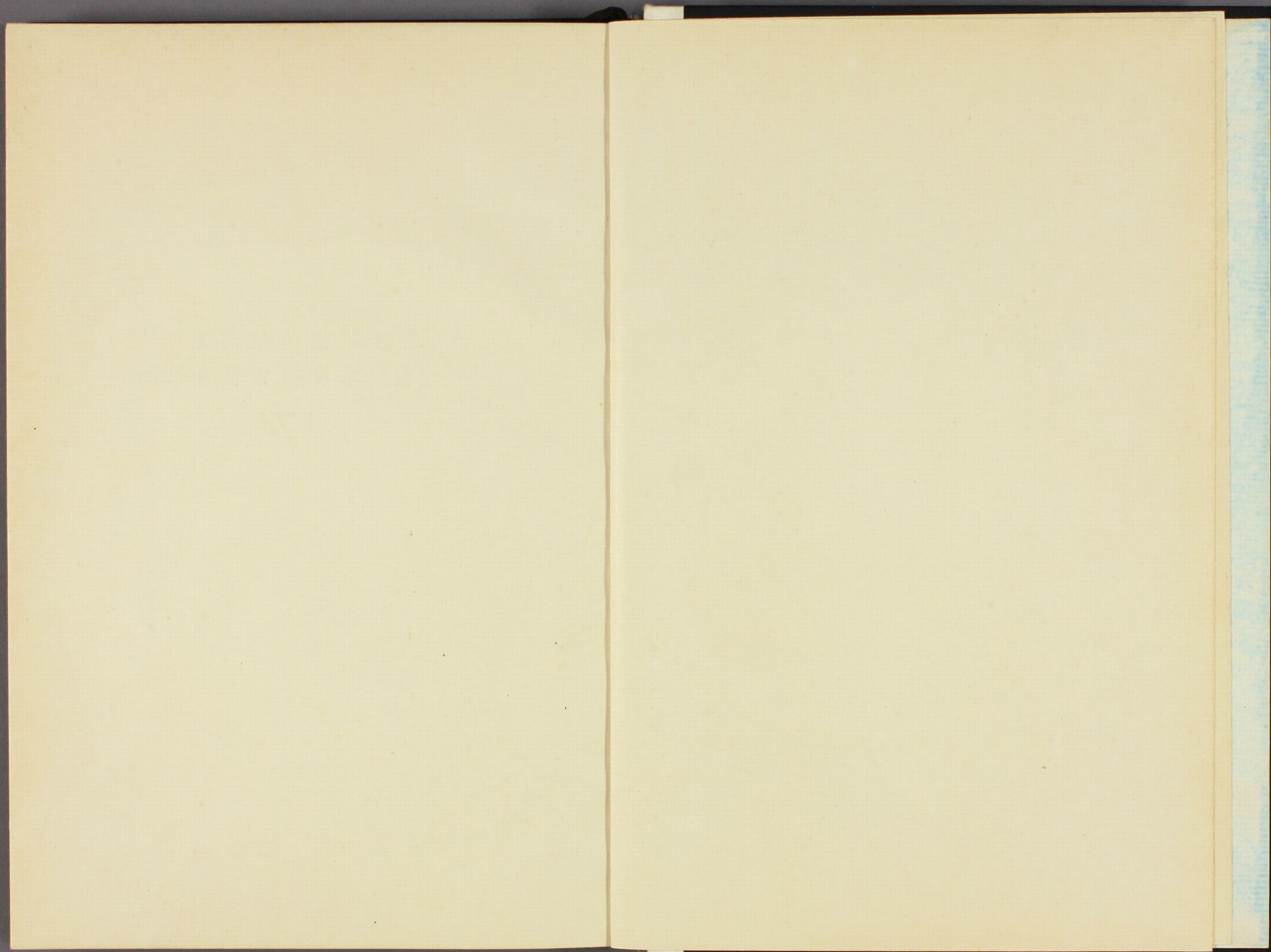


樹

北村
初雄







北村初雄遺稿詩集

『樹』家藏限定版本二百部の中

No.

170,

樹



樹



汗	静	響	響
を	か	も	も
流	ふ	ふ	ふ
し	身	し	し
得	ぶ	に	に
る	り	死	生
小	と	む	れ
さ	肅 <small>しん</small>	で	て
い	か	行	来
土	か	く	た
地	眼 <small>まなこ</small>	こ	こ
を	が	の	の
持	し	碑	碑
つ	と	銘	銘
て	の	の	の
居	中 <small>なか</small>	主	主 <small>かじ</small>
る	に	も	も

碑銘

著者 北村初雄

序

この一卷は、亡き吾子初雄が、去年の春四月病に臥してより、秋もをはりの十一月に至るまでに作りし詩三十有八篇にして、みづから「樹」と題し、友人熊田精華氏の跋文もありて、印刷に附するばかりに整へありつるものなりけり。

初雄は、はやく三木露風先生の添削をうけ、その中學卒業記念として、大正六年七月「吾歳と春」を出版し、次に、同十年七月東京高等商業學校卒業のをりには、詩集「正午の果實」を出せりき。こたびの大

患にかゝりても、全快の記念としてこの集を出さんと、左右の人にもかたり楽しみ、そが出版の準備も、上述のごとすべてとのへありつるなり。さるを、その生前の希望はとこしへに與へられず、今茲に友人柳澤健、日夏耿之介、熊田精華三氏の好意なる監督のもとに、遺稿として印刷装釘のこと成れるは、いとせめて悲しびの中のものよるこびなり。また「樹」と題する小品は、本年一月の三田文學に掲げられたるものなれども、そは初雄が、十一年十一月廿四日、即ちその最後の執筆なれば、こゝに再録することとしつ。

北村初雄

明治三十年二月十三日東京麴町區飯田町五

丁目を生る

横濱市老松小學校

神奈川縣立第一中學校

東京高等商業學校

三井物産株式會社員

大正十一年十二月二日相州鶴沼に卒す

神奈川縣鶴見總持寺境内に葬る

佐賀縣佐賀市精町泰長院に分骨埋葬す

樹
詩
集

大正十二年二月

父 北村七郎しるす

水

Il a fallu des siècles pour que l'œil humain, par une éducation, prolongée, arrive à discerner nettement quelle était la couleur même de la lumière. Cela, c'est l'apport propre de Claude Monet. Il nous montre la ronde des heures sur les vieilles pierres de Rouen.

— Tristan. L. Klingsor

出會

熊田精華に

東邦の水のほとりを歩む

温かい笑ひは再び カナシ の宴のやうに

此の身を巡り

燻る奇蹟の

その素朴な背を優しく撫でる。倚りそふ

眼ざし

沙原の上の

家々は

緩やかに傾き また緩やかに立ち上がり

幡々はたはたは光り

樹々きぎのみどりの滴しじくする日中ひなかの夕ぐれを
響なく 虫の跳ぶ

生活

一日ひとひに一日ひとひを分ち與へて

澱みなく

同じ讀うたと音との舞まひ昇のぼるほとりに塔は立つ。

空が

うち續つく砂丘くぼみの窪くぼみに落す線せんよりも和やほかく
唇くちのうへ

ただ日の昇のぼり 　ただ日のかすむ静しずけさに、
黒茨くろいばらにも

なほ花をば充みたす旅は仄ひかに身うちを廻めぐる。

歡

一すじの髪かみの毛けよりも風にしたがひ
亦

日に照あらされて光かがやく身にも

廻る春あり

暖かく麥よりも熟し行く

血の

おのずと手よりほとばしり

ひとり音なく生くるこの身にも

微笑のなほ

主なきうす衣のごとまつはれる

EX-VOTO

私は幸運を求めない。私自身が幸運そのものであるからである。——ホキットマン

此の生命の深み行くままに

匂ひに充ちて

展かれる頁のすべてを たゞ 風と日との

其の文字を素直にいろあせらすに

託せる心は

海の上から立ち昇るひと片の水のやう——

町の上を歩き過ぎる雲のむれより

なほ白く
心の蕘の群を日照すものの象をば收めて

闇と明るみとの

音もなく融け合ふほとり 一日は
手と化り また 足と化り

かくて

空のやう 樹のやう 水のやう

そのままに世界を飾る御寺はここに

裸身

凡ての人の赴くところ 心の高み

また 低み 日ざかりの花束のやう匂を昂めて

鏡の框をば飾る神と獣とは 肉を装はせ

伸ばす男の手先はつねに柔い弾性にふれて

遙かに 笑ひをおこし

温かく Epienne の徒の「虚しい瞬間」を其身に迫らす

然て指の爪よりやや朱く 心のなかに住むひとは
つと立ち上り 拉典の市の灰と白と緑を超へて

肌うつす レスボス Leshos の泡立つ水晶杯の深井へ降る

Saint Francis

風はやはらかに凡べてを撫て
い群れる鳥たちは 木かげをめぐり
列をなす魚たちは 圓い池へうかび
萱のやうに白い髪毛をしづかに分ける
育ち行く木々のみどりは 擴げる枝に
水を求める 遙かな草はらを被ひ
翻へる葉の白さから 鳥と
虫との 巢はこちよく空へとひたる

息とむる 動きなき静けさののちに
鳥は聲を高くかさね 魚は口を宏くひらき
押しうつる日ざしの淡くかけるも
なほ人はひとり そこに居り

河口湖

暗緑の山脈がゆるく身をば屈めて
白い雲の來往を
避けるやうにして居るあたり

ふと そらが映つて
灰のりと小さい樹林のむれを掠める

一すじの日のひかり……

友の頭がこちらへ廻り

わずかに舳がゆれる日溜りに

舟は音なく滑り

うす蒼い 水気の上を

白い蝶がうすい翅をばひろげて

その山とその波とをしづかに過ぎる

外

花がすこしづゝ 展いて 俛むきはじめる

息をしつゝけて居るとは
今まで 一度も想つたことは無かつたのに
何時しらず

花は

この眼に映つるひと色の 晝をば
生かせはじめ

が しかし
其れはこの身のそとに匂つて居るのか？
または

晝の上に

ほんのすこし日が當つた許りなのか？

業わざ

無限むげんの天そらへと無限むげんの行ゆきひは静しずかに昇のぼる

生せいの果このみを揺ゆり落おしては

獸けものと荒あび

顎あごに強あざとく碎くだくときにも

光ひかりは遙はるかに燈ともり意欲いよくの額ぬかを静しずかに濡ぬらす

Le Souvenir

日當りの善いい古い建物のかたはじを軽く叩くと

あなたは

微こまかな塵ちりがそつと舞まひ立つのを知しつて居ゐますか？

其れは

静しずかに住すみ 憩やすひ 話わし交かした人たちの呼い吸きと

手あとと

眼差まとに

暖ぬかく曇くもつたことのあるひとはじが舞まふのです

黒い睫毛で優しくせきとめる
あなたの眼から生き生きと水のやふに溢れる光の
その閃き 閃き

其れが私たちの其の微かな塵となるのです

俯向

天地といふ名の絶えてあらばこそ
汝とわれとあふこと止まめ

萬葉集

滴る水の一雫にも
自づと
色と光とは備り 岩を弾くに

眼内に
滴り

砂なかの一砂のごとも
響なく
日を微かにも弾くものあり

萱

揺れなびく長葉は靡くがままに
輪を作り
溪樹の色の深むほとりに幽かに匂ひ

遙かの岩より 棧道かきみちより

聲と葉との絡れ落つるときにも

其の圓を

樹葉の茂みを分ける日と分ち

蜘蛛の群の緩く行き交ふほとり

群卵の

薄黄うすきに葉うらに烟るも 唯 青く

雨の中 日の中

事もなく委ぬる葉先の

眞上まうえなる 眞下ましたなる 水のひかり

水

茅野先生に

照り渡る日のかがやきも かくて

深く井を掘るひとの澄む眼には

夕から夕へと跳びうつる魚さかなのやう。

茂り合ふ林に花は連なり

匂ひに撓む風かぜのむれが 遠い天そらとともに

輪わをつくる この身のほとり

砂に塗れる指手へと残る 無数の微こまかい

光の群にも映る 水への想ひは
身うちの深みへ つねに足をば降らす。

待訪

日夏歌之介氏に

山脈の上に白く落ちる瀑の音は
この部屋の (この仄明り!)
絶えず醒めて人を待つ 物の上に
また睫毛の上にと 優しく網を張る心もち

書棚に竝ぶ
重たげの本の背のひとつ ひとつに
蘇生へる古の祭へ

燈を捧げて祝ふところに

日は射し 影は集り

更らに深く此額は押し伏せられる。ああ

鳴る砂の響に 色のない絹のやう

分秒は顫ふ手指に虚しく落ちて

動かぬ足先に

繪のみ展らせ擴がる無人の境——

人ひとり 一つの夢 一つの世界……

移り行く静かな風光を壊つ息も通はず
日毎 書き溜める (この仄明り!)

女

宛名なき書牘の堆うづたかく黄ばむほとりに
たゞ穿山せんざん甲かの舌したのみ繁ひらく翻かへれる。

序詞 (La Camargo)

女の前をみなにあるは薔薇ばら 女をみなの後しりへにあるは薔薇ばら

女の踵かかとやはらかに立ち 緩ゆるく腕かひなうねり始め
林はやし斜しやめに陰かげを動うごかし 日ひ景かげは鈍にぶく東あづまに移うつれり

女の身からだ體たい すべて夢ゆめに懸かかり 樹きの上うへに憩やすひ
淑しよかに湖うみりゆく世紀せいきの灰あしかなる白しろ 灰あしかなる匂におひ

廻めぐりゆく温情わんじやうは柔なかき旋風せんぷうの中なかに輝かがよひ
女をみなとび上あがり とび下くだり 音ねもなく背せ伸び展ひらけ

子供の聲のごとく女の眼ねむたげに睫毛のなか

進航

Mais, O mon coeur entends le chant des matelots - S. Mallarmé

風景はめぐる

その中を

更らにめぐる一つの風景

日々

貯へられる懸帆の匂ひ

平らな渚にうち煙る

真白く泡立つ舳の波は ただ肅かに砂へと映り
姿なく雪線は
蹟をたづねて山より下る――

遙かに誘ふ眼差に

陸地は遠のき 緩やかに帆はめぐり

明るい五月の 其の進航は

花々に充ちる峽間より

空へと落ちる

暑い日指に射られる白雲の群かのやう

居竝ぶ丘々は

同じ春日のもとに青く霞むで 穩に
唯 其のままに
蒼穹を頷かさせる暖かさ かくて
風の頬にと絶える

眞夏にも
なほ縫れほぐれる水影のあり
暖かく横桁の布をば傳ひ
涼しく 濡れ 充ちわたり

光る雨の中を天へと消へる――

帆船

柳澤健氏に

*Je ne tu voyais pas. J'ai regardais les femmes et les fleurs
Comme on regarde des étoffes on des images: - R. G.*

海の風が手を舉げて和らかく
額のうへに
波の反射を擲げつけて居る この日和

海を眺める籐椅子の中に
身をば深く埋めて 睜る女の睫毛から
時をり
一すじの

白い烽火の煙が秋のやうに立ち昇る

見交す眼ざしの霞む方に

水脈は光り

同じ心の航路を採るも

共に取る

手に映るのは女の帆かげ 己れの帆かげ……

眼のほとりに

褐色の昔ながらの砂漠はあふれ

其を超へて

はるかに薔薇は咲き はるかに女はわらひ

女の髪の毛の光る中を歩む

日は

酒禱ののちの和蘭人のやう 氣輕げに

女の唇のほとりに緑の尻をば吸する

La Nascita di Venese

橋爪健氏

春は新らた 善き音に充ちて地は再生の春と在り

—Pervigilium Venese

I 序詩

(女の群の唄へる)

輝やく胸を眞青の空にと涵して

白さをつよめ
心の裡うちから立ち昇る朱あかるみを

其處にと映うつし

外そとよりの火を
内よりの火と

合せ祀まつる善まきかの日を裁きくわが神のほとり

薔薇と

Mitoの

匂におひを自みづづと融とかすかの天そらよりの暖味ぬくみのうち

私達は素直に伸びる。

夏の雨のほとりの

樹のやうに

ヴェヌスの優しい眼まなこざしの下もとに素直に伸びる
俛うつむきがちな燃ゆる額かぶを

強しいて

押し上げ

私達の花はなさく肉體からだから

この神は

優しい手並で藍色のひと一つの鍵かぎをば高く響かせる

II ヴェエヌスの生誕

白い海の泡は
真青な海の面にその色を昂められて
匂やかに
風を醒せながら小魚のやうに身を屈め
息をついては
其の身に沿ふて
日の光を圓るくついと滑らせる。
海の底から生れる

其の

微かな響のむれを吸ひあげる若い風の神は
胸を張り

半ば消えかかる

古の

挿話を

豊かな其の唇の上にと再び顔をさすかのやうに眼を閉ぢて

水に漬るごとに

白い翼を

静かに展いてはまた軟かくそれをば閉る。

波。

軽く下りては上るその身體のうへを
和かく

包むで居る薄青いランの布がはためき 崩れ

絡れては黄金色に空へと昇り

見かへる空は

一面に

海の鏡を映しては静かに其の燃ゆる焦點を滑らせて
白い雲のほとりに近づくと

其れは

優しくそこに朱らむ虹を曇らせる。

恍とりと俛ぶす

風の神の

其の真白い額にふれてはまた翔けめぐる海の鳥が
ふと

脚を強くすくめて 遙かな黒點となり

風の神は静かに眼をあけ

微笑むと

かい抱くかのやうに音もなく手をば展げる

潤ふ唇の上の

口づける

真白い泡にふと交るいと香しくいと温かきもの——。

濡れて居る髪の水が

軟かく

風の神の優しい唇のほとりに水を吸はせて
光り始めると

静かに波だち分れ縋れはぢめて おづおづと

白い肌が

うす朱く花をひらいて仄かな青を押し上げる。

肩の圓味は

亞麻色の其の髪毛の息を弾ますかのやうに

日の光から

真白い輪のむれを限りなく其の頂上に擲げかけさせて
夢見ごこちに循る血しほを喚びあげる。

空と海とは明るく汗ばむ藍色の睫毛のやうに

軽く

瞬たき

ひとの眼に落ちるひとの眼よりも深く交はるために

心地よく

胸から滑べる

脹かな手の重みをば支へかねる花びらのやうに

撓む

腿のすがたを超へて 光る踝のほとりまで

輝く女神の身體に沿ふて走せめぐる。

其の揺れる青い髪もつ Nymphs の背をばかるく叩きながら
愼しく

ヴェヌスは

明るい笑ひを映らせる素足を海から渚へ運ばすと

燃える足形の周りから

温く烟のやうに圓味を帯びて群れ立ち昇る

春の頰は

一面に

動く砂の踊るのをば見せるかのやうに

いち早く

淡綠色にと霞む陸の方から女の群を走しらせて

直ちに

一ひらの Millo の花のやう

緑の影もつ

華やかな真白い長い腕の環をば作らせる。

乍し寂しげに波立つ

海は

己れをうす綠色に映すヴェヌスの優しい背にと寄り沿ひながら

生れ
立つ

永遠の春をば唄ふそのヴェヌスの心の裡に
己れを

恒に

想ひ返さす便にもとかの絶えざる波の顫えを收め
滑り 遠く 身をひるがへし

美しく惱む女神に先づ温く顫へる肉體からだを持てあまさせる。

客

客

(舊作)

踏むで来た

記憶が海波の泡立つ光のやうに揺れる。

青い楊柳の列れのなかに

日を額に受けて

影　ひとり

涙は

天に映つて居る。

夕方の混まがりまた散つて行く暖い息のうちには
招ずる

客が

眞晝の影のやうに動いて居よう。

静かな咳しほぶきが

花を和やはらかく伏せてこの静かな生長に合圖する。

お伽噺は子供の時からなほ閃いて

そのなかに明るい指標を そつと

晝いて見せる。

客は

黙つて坐る。

その長い睫毛の下に深い井のやうに

まだ影のない象かたちに充ちた倉を持つて居る。

鮮かに顔は眼に映り

瞬くと また

滴る煙の天への仄かな響のやう。

蠶さなぎの背のたかまる毎に

枝の上に光る足あと 其のやうに

人の思ふが儘に

暗い 明るい 世界が素直にも歩いて来る。

待つて居る

砂の上の足音を 客を

皺の多い笑ひからでもなほ若い響を沸き立たせて
客は

(胡麻よ ひらけ！)
そつと門をはづし始める。ああ
戀の一言にも
なほ身を躍らせる青年の羞しいひと時。

荷風全集

更けて行く秋夕が虫を遙かな庭土へと沈ませて
淡い古のことがごとを青く寂びさせると亦ともに
和かい幽愁の裡 半ば其れを持ち上げさせて
心の仄かに緩みひとり書齋の椅子に沈むとき
傾むく頭布の邊りを押へる女の手よりも眼に暖かく

何時しらず行き過ぎるこの青年の頃ほひを匂はせる
消えて行く日本の女の床しさを また優しさを
色凋せし和装の書の列の上に捉え得るかのやう
彼の頸すじの柔められたうす黄と朱とのおちあひを
眼に泛ぶ黝む藍と鼠との交錯に一しほ色を昂めさせ
蘭の香りする昔風のしづかな卓へと倚りかかり
陽明が傳習録の日頃好める一章句をば摘ひ上げ

目無體。 以萬物之色爲體。
耳無體。 以萬物之臭爲體。

明窓のほとり 心を澄ませて味ふ閑日に
黄色い葎もつ山茶花の 茂みからむ小鳥の背にも
仄かにたゆたふ空の青をば確と見さだめて

茗茶の香りに振り返り

屏間を立てる後姿に其れと見入るとき 其處に
寶曆明和の頃よりの和い日ざしはゆるく照りそひ
寂びと色との纏れあふ心の底に一葉のやう響を落とす

夾竹桃

静かに庭樹のむれが垣へと添ふて

和かい銀青色の影を
乾いた土へと積み重ねやうとする頃ほひ

白い雲が融けかかるあの大きな空のひと青を
思ひ出のやうに匂ひ付けて
咲き展らくあの花のさかりの夾竹桃が

秋は

ひとつづつ落とす黄色い長葉に
夕ぐれの佗しさの中に燈を添えて
家へと歸るころには

蒼黒い音と影とのみが微かに耳へとひびき

晩食ばんしょくをすませて
圓卓子えんたけへと向ふころには
椽えんのほとりへ小さな音をば乗のせては消さす

ふと見上げると

年老いた父と母との顔の間あいだからは 秋が
重ねた手先をといて

優しげに哀しげに立ち上がり

遙かに空の匂ひをつたへる布ぬいをば解いて

黙つたまま静かに針もつ母と其れを縫ひ始め

風に吹かれて

浪打際をちつと二人ふたりで見つめて居るかのやう

父と母とはいつも

頭かしらの上に来る同じひかりを受けては暖あたたまる

その二つの影の静かに遠のくことを身に感じ

圓卓子えんたけの白い花模様のひとつを

この指先でかるく弾く頃には

黒い小紐で

背せ低い庭樹の中をすらりと抜ける夾竹桃が

金色こんじきに明るく昇る月の面おもてをば確しかとゆはえて

微かなひびきとひかりとを風へと通とがす

風

私を絶えず歩ませて呉れるものの懐しい匂が

風の中から

静かに立ち上がるのを

私は

人の手に撫でられて眼をつむる犬のやうに嗅ごう

風は透きとほつて居る

で

移つて行く凡てのものを中に收めるかのやうだ

其れは春になると景色を人の息のやうに温めて

恍とりと此眼を瞬かせるが

夏になると

生ひ繁げる

樹の葉にふれて夕を迎へる静かな舌を展らかせる

併し 私は秋のときの

淑やかな風の営みを知つて居る

萱薄の群から和かく穂花を己れへと委ねさすかのやう

風は

人の卓の上にのせてある

本を展らかせ

黙つと氣を落ち付かさせる心から長い手紙を托させて

風は海波のやうに書き終へず

恒に

動いて居る筆先の滴りとなり飛ぶ翅となり

風は戀人のやうに

嬉しげに

顔を赧めながら悉ゆるものに 彼を眺める

冬だ

私が寂しげに

部屋の中を圍り歩く雪の夜は

風は動かず

私の血と肉と心との凡てから重みを集めて

其れを

専念に私の眼ざしに置く

かくて 燃ゆる其の眼ざしは

緩るく

太とく

物の上にと己が重みに堪えて 無手と足をば懸ける

風は透きとほつて居る

て

移つて行く一つのものを中に收めるかのやうだ

私を絶へず歩ませて呉れるものの懐しい匂が
風の中から
静かに立ち上がるのを
私は
人の手に撫でられて眼をつむる犬のやうに嗅ごう

樹

稲田稔氏に

婚姻

矢野目氏夫妻に

涼しくわが眼を繞り わが耳を繞る微風のむれは
暗碧の海をば劃る明るい小枝に言葉を與へ 頓えながら
暮方の青葉に映つる 女の臂より白く空へと消へて

花々は開き その徐ろの展舒の中に色は息ずき始め
松の林を野へと導くときの東邦的のやすらかさは
静かに寄せる唇の上に 空からの青をばすこし影らせる

わが眼は一畝の畑のやう 広く 動かぬ貌に横たはり
専念に凡てのものをわが夢に 生を與へる鑿として

過ぎ行く雲を雨となし また湧き上がる峰として

花には色を 果には汁をば増させるものの優しさに
翔り来る神々の御足を身内に招するものの肉により
身を輕ませ 新葉のやう凡へと其れを靜かに托す

交

樹の川に打ち沿ふよりも響のありし

繪より

手の立ち

動かざる睫毛に添ひて上るとき 食匙は

唇の邊に重く顫えむ。

蜻蛉の秋の翅よりも平らかに かつ 光り

暖かき瞬きの音たてて廻るほとりを

詩の

石と冷く かつ 眼と熱く われを壓すとき

我手は 手なり 我足は 足なり

我は

名あらぬ前の陽の如く

悉ゆる國の上を過ぐるも等し。

陶器すゑものより
鋭く微かなる季ときの移りを悟る
凡て
詩に揚げられし睫毛の裡にと斯かくてこそ
物あり
息なき風の如くにも静かに通ふ。

期待

暖かき窓のほとりに倚るひとの背せよりも
明るく

燃ゆる書物の輝やく紙の上より翔かり立つは

わが憧あこがれなり

物すべて光ひかりつつ響なく滑り行く心の裡うちに
わが息いきならぬ息のありて
我胸を攀よち上りつつ わが手に溢れわたり

眼は展ひらけ

樹立こだちの上の和やはき雲より雨をば起して
省かへりみる
我身わがみの邊はたなる悉あゆるものを静かに濡らす

意 途

道 險けはしくも

なほ平らかにわれの足をぞ印し得るは

凡て

眼ざしの深さに據れり。其の

動かぬ空にと

量はかる

視力に

石燃え

旋まひ立つ春の

樹を揺ゆり

微かにも烟り立つ緑を起せど

離さかれる友の

なほ我に入り

わが性癖のひとつに 融とくるが如く

須臾

離さかる世界の

より強くわが脈搏を押し詰めつ

詩に

流れ行くわが息うちいそに 象かたちつくるも

動ゆがぬ舵機あり

波

平らかに

眼ぞ

風も来ぬこほとりにひたと下り立つ

樹

人ひとり立ち上がる部屋うちの

静かなとよめきを心に映うつす 路のうへの

一樹は

定まる形を己れに與へずしとやかに

風の来るまままに 俛かし また 伸び上り

目を息いきしながら

蒼い時から蒼い時まで 聳え立ち

静けさに静けさを掘る動きに沿うて

押し移る

その色は

眺める眼まなうちの充あゆる風光けしきを生かさせる。

生いのちを女の睫毛まゆげよりも かげ深く樹姿きそにと見出す

遙かなる眼差のひと時こそ
身は
立ち
額は上る 水より広く空を映して

認識の時

かうして己とお前と目を見合せてみると
あらゆる物がお前の頭へ
お前の胸へと迫つて来て
永遠な秘密になつて見えないやうに
見えるやうにお前の傍に漂つてゐるではないか——
ファウスト第一部

早春の裸形の木々の小枝の上にも
自づと

爽かな緑の烟り始めて 日を弾くかのやう
静かに育ち 雨まつ暇もなしに伸びる己れにも
自づと
微かな歡びの烟りはじめ 行ひの上に現れて
省みる眼をば絶えなく伏せさせる。

身を繞る物のすべては
昂まる己れを昂る己れの上に映すかのやうに
ひと息ごとに
温く

心の奥底ふかく押しかくす微笑の群も
力強く

泡となり 頑なに動かす手先の末に泛び出で

限りなく緻く其れを顫はせる。

眼を伏せ 眼を伏せ 水よりも滑かに行過ぎむとする
人のまへ

抗ふ眼をば強く壓すとき

黄昏の水邊の像よりも静かに佇みながらも
ふと

やはり眼を伏せ

其のひとは淑かに風をも立てず顔をば外らす

境遇

一日の裡

強く人の心を壓すものが

再び

身軀を弛ませる 深夜の憩ひの裡に身を揺り

主のない上唇の邊から

荒く

強く己れを言葉に罩めて現すとき

其れは
静かに
人間の弱さの上から立ち昇る香華のやうに想れる。

併ど松の樹の

其の頂きに
擴がる蒼空のうちに微かに波だつ緑を見とめ

立ち

伸ぶままの

己れの頂きからもなほ明るく息吹が立ち上り

身を繞る

物へと

瞬きあふ響もなしに融けて行くことをば 亦 思ふ。

喚ぶ名から

戀人の全身がわが眼の前に閃き上るかやうに
熱く

業への希求は 然こそ

束ねる手の上に

ひたと 頭を置くものの
なほ其れを

跳ね

石

躍らせ
恒つねに思想と行爲とが無限に泡立つ間まはひに落ちたぎる

陶淵明

涵^{ひた}すべき挿話のひとつなく たゞ素直^{すなは}に
松籟の音のみ守る静修の一日^{ひとひ}に沿ふて
青く貯へられる五柳の季節の影に
静かに六月は羞^はかむ手をば差伸ばす

聲ひとつ緩^{ゆる}く其裡^{そのうち}を廻る室^{へや}うち
共に仰ぐ空はひとり^{ひと}に明^{あかる}く他に暗く
主人は聽て客の左^{ひだり}にそうて座を換え
樹よりの風に和^やらかく其の額を冷やす

客笑へば即ち主人の笑ふ酒榻のほとり
雲は長江に沿ふて跳ふ鮎の香を齎し
樹滋きところ落ちる水の 烟立つては
心にひびく遙かな狼火を空へとみたす

楓樹

撓むがままに其の樹姿は涙よりも静かに
この眼のほとりに滲み出て 撓むがままに
光と影との戯れのなか素直に葉をば支へながら
見つめる心に自づと優しい重さを競はせる

Le 4 Juin 1922

其のうねり 其の歪み 其の分れる枝の
愼しく立ち上がる節々のほとりにも
凡ての姿の上に 幹はこの眼を頷かさせる
微かな息を風を超へて水の音にと通はさせ
揺る雀の旋る中をも 樹は事なげに日に向ひ
幾千の小枝の先の夢みる力をつと青ませる

Le 9 Juin 1922

榧

夏深き双手の上より緑の影の立ち上り

光の卓子に充ちるを 淑やかに迎へ入れ
佗しげに挨拶しかつ座らす血脈の邊り

揺ぐ樹をめぐる風は その深さを現し
梢の上のひと葉の面にも闇をば加へ
日のもとの緑のうへにはなほ緑の生れて
溢れては底なく見詰める眼内に落ちたざり
秒間の風光の重さにふとも心を撓ませる

滴する緑の響は 静かに明るむ耳をば揺り
詩は疎竹の庭より湧き 立ち 身をめぐり
日のひかり樹のかげ 淡く共に 双手を過ぎる

Le 6 Jeillet 1922

蘭の日曜日

商なふ青き魚らはみな海へと放たれ
渚にちかい穏かな白聖の家並の上の
樹の花からひと日の朝は匂ひ始める

軒うちの明るさからは音ひとつ泛ばず
石塊みちの角邊に憩ふ虫の背かがよひ
廣場の草を風は静かにねかしました起し

竝ぶ蘭の青さを踏むため降りたまひて
聖の手を合せ素直に光つつ歩み給へば

昂められる樹の花の匂に咽びながらも

人達は海の波にまけじと一聲に唄ふ
祭壇を旋る祭衣の凡てに聖は映へて
風と青とは砂洲たかく照る日の邊り

布袋和尚

梁貞明三年丙子三月示滅

置く袋と杖との傍に大きな脛は横たはり

更らに大きな腹の据えられていと安らかに
端座する嶽林寺東廊のほとりは朱の寂びて
府樓のかすむ遙かな朝々の賑ひをば灰のやう
緑樹の影の濃く絡はる僧衣の上に沈ませる

腹をば揺り醜き姿のゆるゑに罵詈する人をも
大笑のうちにと自づと融かし水のやう
澄める心を舌の先に滴らさせるその氣安さに
齋を乞ひつつ廻りし國のみな暖かく眼に還り
驟雨の中の家のやう寂靜の面を暫し暗ませる

偈

彌勒眞彌勒分身千百億

時時示時分時人自不識

今は曾て青く心を過りし物の凡ても優しく熟り
色ある衣のやうに世界の重さの和く落ちも果れば
風ゆき風かへる嶽林寺東廊のほとりは閑として
樹なく寺なく塔なく峯なく また 己なく
慈顔は寧ろに入寂の深みを昇る魚と明るみ渉る

Le 23 Janvier 1922

離愁

空はひとの寂しい唇の上から湧き上り

Aimer sans espoir est encore un bonheur - Balzac

赤松の梢とともに すんなりとした肩を
小山の頂きにたゞ薄青くかすませる

風の草はらとの睦しい遊からふと立つて
松をばならし髪をば解かせて雲へとはゐり
しづかに十里の海へと落ちゆくけはひに
ひとは膝の上の想ひにみちた手をば反せて
崩れてゆく崖の侘しい音を心にかさね
松の優しい慰りにもなほ香をば聞くこころ

Le 17 Août 1922

終に臨むで

故大石美津雄氏に

静かに死なう。自分には慕しい生成の深い力も今は
逆しる涙を心の裡に押へては環る血しほの中に滴らさせて
真白く四肢を淨めさせながら 消へて行く脈のなかへと慕ひ入り

静かな樹の間を昇る霧のやうに重く漂ふものが在るので
手はしきりと其れを打ち拂ふが 眼は少しもたぢろがず
集る人の聲をたよりに其方へ開かぬ唇を寄せながら
また反り視ては和かく身を繞る凡てのものに打ち笑ひ

思ひ出の懐しい便にもと臆げにすがたを起す窓外の
空のたより樹のたより地のたよりもみな受けて 今はただ

優しく頷き 爽に沈黙をこえるあの和ぎを待つばかりである

日に會つてなほ烟り得ぬ淡雪のやうに心は繊細い
静かに死なう この私は……

暖き諦念

秋の光のもの寂しさのうちにも
なほ揺めいて居る彼の黄なる明るさを
ひと日 澄める日ざしを
圃に沿ふて眺める折に捉へしか

Le 23 Août 1922

病やまひのなかに住すむものが 手てを交まね
心こゝろに架かける微よそよそかな橋はしを渡わたるとき
再またび鮮あざやかな記し憶ゆのうちに現あれて 其そのれは
優やさしく足あし音ねを胸むねにひびかせる

崩おちれ落おちる山やま百ひゃく合ごうのはなの喘あへぎのやうに
清きよ純じゆんを徐おもむろに打うちこはつ
病やまひの音ねなく夜よ々々に俛ひりかゝり
強かたい香かほにかほそい胸むねを壓おすときにも

深ふかく夜よを窺のぞふここちに息いきをば潜ひそめ
静しずかに眼まなこを見み展ひいて
病やまひ者ものは再またび彼かの明あるさに

古ふる賢けんの書かみをくる如ごとく清きよ澄じやうに己おのれの心こゝろを照てらせる
その彼かの黄わうなる明あるさこそ
病やまひの裡なかにに住すむものが祈いのちと意い志しとを越こへて親おやめる
生なま成なりの力ちからを押おし 照てらし
其そのを外ほかに現あらわしめず深ふかく心こゝろの内うちに沈しづめさせ

FRA ANGELICO が壁かべ畫えの慎しんしい藍あゐ青色せうしきの底そこから
静しずかに湧わいて來きるあの和やはらのやう
人ひとより出でづる光ひかりとなして
極ごくく微よそかながらも行おこなひの上うへに射さし昇あらせる

松樹

恆照則恆動恆靜 王陽明

寛たりと 松の樹の上に身がまう雲は
緻く姿を刻むて ただ一所も平らかならず
夫々 其れに適へる影を涌かせては
優しく空と松との二色を己の中に溶き合す

我もまた石卓に凭り
空と松との幽な色の交りを 心に深く結ばすに
省みる行ひのいと細微なるものに至るまで
強く心の淵に搖ぎしか

掌上に
相なほ得ぬ想念の 春の楊の如く烟り立つ――
濃緑に 蕨葉の 肅かに色うち沈む夕となれば
雲 消へ

松樹は樹杪と幹とを招ける間に與へて素の儘に
立ち
心と闇との執念き境を音もなく壊ち 徐ろに
我をば重き風となし
互ひに喚び 睦み 語り合ふ万象の中
風は

樹の奥底ふかく吸上げる 静かな水に波うたす

詩人のうた

制作は日なり、批判は影なり

静かに地をすべり 壁に立ちあがり
日を頼りに 優しく私に憧がれて
私の心のなかに深い夢を降らすところの
其の影は私ゆえに石像の國を佗しくよぎる
宏い視界の中に然て影の像は座りながら
寂しく 泣き得ぬ 笑ひ得ぬ
今は日と共に消へ得ぬ 自分を想ひ
爲すなき私にたゞ重く額を伏すばかり

私の心が乍し遙かな雨の響に濡れ耀くと
その静かな忍苦はしずかに熟り
照り沿ふ日ざしの上に現れて
影は 優しく 涙に充ちた眼を上げる

私が撓みなく樹の夢より深く地を下り
未だ象を生まない爽かな闇に根を張ると
影は光り 行ひとなり
慎しく私は閃く闇の無限の重さを手に耐える

母

病めるもの詠へる唄

Le cœur d'une mère est un abîme au fond duquel se trouve touj. nrs un pardon — Balzac.

暮くれぎはの中に暮くれぎはを見るひと刻ときは
物も動かず
鈍い光のなかに
音あるはたゞ沈みゆく身のひびき
枕に重く頭かしげば
親しげに
我をつねに見下ろす書棚のうへの
本ほんの群も

ささげる意味を今は支へがたしと
薄闇に 姿をかくす

沈黙しんもく

吹き入る
そよ風に身を乗せてうつらうつらと
この我の
ミルトの梢こずえかとも
遙かに
天あまの匂をたゞひとすじに嗅ぎゆくところを
ふと押へ

暖き人のところに立ち歸らせては
憂げなる眼ざしの
瞬きもせず
母は
手を上げ また熱ある此額の上に静かにあてる

見ること

怒を鎮め 人をば寂しく赦すひと時の
心の豊けさ 靖らかさ また潔けさも
遠めぐる

Le 2 Octobre 1922

勝者の念と傲りとに静かに頭を垂れさせられる

額を絶えずより耀かす御佛の像を刻まむには

動かぬ手をも

動かぬ足をも

猶用ひ

身を澄ませ

物を量り 暖く其の核へと觸れる心に據ろう

恆に見詰むる者に在つては

己の晝と外の晝と些かの違なく緩かに融け合ふ
眼育のごとく

夢より生いづるものと
現實まことより生いづるものと
相あひ合あひし
等ひとしき力ちからと智ち恵えとの中に園いん兒にの如ごとく群ぐれ遊あび
亦また育そだつ

内省ないしやうは

暮くれ方がたの窓まどに凭よる静しずかな面おもて輪りんに映はへる光ひかりと共に

闇やみに交まじり

心こころの深ふかみに 重おもく唄うたひつゝ沿したがひ降くだり

日ひ毎まい

僅わずかかに擴ひろがる

穩おだやかな小ちさい風かぜ景けいの中なかに豊ゆたかに果こを耀ひらかす

眼まなこの自みづかづと潤うるむ時とき 人ひとは早はや孤ひとり獨どではない

畫堂えだうにて

人ひと性せいの奥おく處がから照あり出でる

日ひは

畫え面めんに沿したがふて

暗くく沈しずむ世界せかいと明あるむ世界せかいの區け別べつを作つくり

亦また

己おのれに集ある

畫え面めんの遙とほかな距きょ離りの凡およてを優やさしく一ひとつの光ひかりにうち融として
内うちに住すまへるひとりひとりの畫え家かを微けい笑えいさせる

Le 7 Octobre 1922

掲げられた

悉ゆる書の裡には 瞬かぬ 生ける力があつて

恒に外の世界を見つめながら

より見つめながら

訪ふ人があると

其の眼に重く滲み入り 身を翻し 佗しげに書に還り

亦 強く 惱へる

あゝ此の私をも

なほ形象となすまでに

深く想ひ憧れるものが在るのであるふか……

幾千年となく

日と共に新しい眼を限りなく闇に沈ますが 沈ますが
夢は熟らず

静かに絶えず人の姿を現す日を強く裡に充しては居るが

書は

恒に寂しい――

ひとりの書家はいつ己自身を描き終るのか

Le 13 Octobre 1922

死への想ひ

本を伏せ藤椅子の中に身を重く沈めて 靖かに

静かに 疲れた睫毛を憩はすために眼を閉ぢると

私の身を繞る海に暖められた秋の空氣の和かさや
此の病室へ時折落ちて來る小鳥の聲の群がり
私の手のひらに迄も優しく蒼い天をば低ませる

想ひ出もなく希望もなく唯胸に息を昂める一時ののち
光の渦の音もなく行き交ふ中に 泛びあがる
親しい顔のひとつひとつに心地よく頷き返して行くうちに
ふと重ねる手先のその熱に蒼い天の匂を顫はせながら
若くして死ぬべきこの虚しい命數に心を痛く沈ませる

身に滲む寂しさをその眼尻につよく押へて
私の背のみに絶えず照りそふ私の詩のかずかずを
なほ幼兒のやう獨となし得ぬ過ぎ去つた私の顔々を

樹上に光る風と共に優しく秋の上に旋らせながら
眼は確と靜かに石とともに黙るかへる

悉るものがみな會釋して影深い睫毛の裡へと降り
新らしい姿と意味とを持つて眼に涌き上る
見る事に始り見る事に終る私の生活の最後の日を
祝ふがため 努力に充ち充ちた日の裡からのみ 祈る
私の貧しい血と肉とに依つて 死の穩かに花さく事を

日夏耿之介氏に

故日夏夫人を悼み合せて詩人の絶唱のならむことを祈りつゝ

Le 18 Octobre 1922

姿を傷けられてもなほ穩かに人の纖弱さを看護ながら
深い心の搖きを物靜かに沈ませて居る古い都のやうに
その優しい情と行ひとに悉ゆるものをみな和げて
靜かにあなたのために凡ての日から荒い風をうち消して

今は貴君の額を聞く曇らす悔と寂しさとの上に
また愛惜が數知らず積み上げるあの慎しい逸話の上に
なほ暖かい眼差を春の日ざしのやうに照り沿はされて居る
亡くなられた彼方を胸一杯に哀むで居られるあなた

懼らく貴君はあの日當りの善い南向の椽側に唯ひとり
眼には遙かな樹のかげを湛へて 心になげき 心に咽び
青々と茂げる樹葉の重さに壓れる風を受けながら

麗しい虚しさを深く見詰めて居られる事と思ひます

乍し仲秋を水のやうに映して居る庭から眼を返し
絶ず香り立つ沈黙を湧き上げる白紙に黙と見入られるとき
強い惱みを超えて 淨く澄みまさる心の深みから
生ける姿が恒に優しく外を窺つては居られますまいか

Le 18 Octobre 1922

跋

千九百十五年六月四日の午後、僕は始めて君の家を訪ねた。厳密に云へば尊大人の家である。當時五年生であつた君が四年生であつた僕を中學校の歸り途に誘つたのである。

君の家は横濱市南太田町二千百十八番地に在つた。最も繁華な商業區の家々の薨を越して、羅馬教會堂の色さびた二つの塔や Temple Court の大きな屋根が青葉の上に聳えて居る山手の丘を望んで居た。君の書齋に續く二階の廊下に立つと、僕達の心へ常に海のむかふに對する Nostalgia を孕んだ波止場のあたりをも見渡す事が出来た。

然し、その日僕は家の中へは上らなかつた。廣い芝生にむかつた縁側に腰かけたまま君と竝んで、眞紅な苺をつぶしながら晝と詩と旅行との話を

した。

君は Union Church をかいた上品な然し明るい調子の水彩畫と一所に、今でも君の書齋の何處かに藏はれてある、君が始めて Pastel でかいたあの愛すべき一枚の小品を見せてくれた。その畫の中に赤い頬をして眠つて居た愛しげな童女も今は見違へる程に生長して居る。然し僕にはその日の記憶がなほ鮮かに、君の静かな身振りと蕭やかな眼差しと、又ほの暗い西洋間の壁上に見た馬明菩薩の慎しい美しさとを持つて甦つて來るのである。

その後、僕は君の家を屢々訪ねる様になつた。やがては僕が君の家を訪ねない日は君が僕の書齋に來て居た日であつたほど屢々訪ねるやうになつた。僕は、おそらくは僕の生涯での最も善いまた最も幸福な時間の幾つかが其處で過された事を信じて居る。

然し、千九百十八年四月九日には僕はその家に最後の訪問をしなければならなかつた。

空が君の大好きな矢車草の花の様に碧く潤つて居る朝であつた。その日も、始めてその家を訪ねた日と同じ様に僕は家の中へは上らなかつた。廣い芝生にむかつた縁側に腰かけたまま君と竝んで、香り高き Orange を切りながら、僕達の若い時代に、Exotic な美しさに對する特種の感興と、季節の變化に對する幼子の様な驚異、明るい外光への心からの讚美、または風の様な快活さや、微笑や、上品な Humour などを培つた海港の横濱と、そこで過された僕達の日とに就いてかなり感傷的な心持で語りあつた。

一時間ほど後、僕達是一所に、君の荷物を分けて持ちながら櫻木町の停車場に行つた。其處で僕は君と握手して別れた。その日に君は東京市外日暮里元金杉百九十六番地の家に移つたのである。

その後、僕達には其處の小じんまりとした君の書齋で、夾竹桃の花の上に雪崩れて來る白い雲を仰ぎながら、言葉すくなく Walter Pater に就いて語りあつた朝があつた。前庭の叢になく虫の聲に耳を傾けながら、おぼつか

ない獨逸語で然し生き生きとした感動を持つて Rainer Maria Rilke の詩章を飽かずに讀んだ黄昏もあつた。幾度か冬の夜にまた春の夜に枕を並べて、僕達の生活に就いて、また僕達の藝術に就いて、語りあかしたのもこの家である。

今年、君はまたも思ひ出多いその家を捨てて、おそらくは君が永住すべき、東京市外入新井町木原山千六百八十番地の新しい家に移り住んだ。七月一日、君は病中の軀をそこに運んだのである。

僕は今、君の詩集「家」の終りに伴侶としての一言を記さうとして、餘りに多く、君の住んで居た家に就いて、またそれに對する僕自身のなつかしい追憶に就いて書いてしまつた。然し、僕にとつて、今日訪ねた「家」こそはそれらの何れにも増して慕はしい家なのである。僕はその全體に就いて、また細部に就いて、心からの親愛と畏敬とを感ずる。僕には、君自身が許して居る様に、その一つの破風の持つ思想をも、またその一つの勾欄の表

はす感情をも怖らくは誤る所すくなく捕へ得たであらう。また他の親しい友たちの幾たりかがこの「家」に正しい理解を持ち、限らない敬愛を感ずるであらう事をも信じて居る。然し、世の多くの人々にとつてそれは遂に閉されたる迷宮たるに過ぎなくはないであらうか。捕へ方ない蜃櫓たるに過ぎなくはないであらうか。

君は世に一步を先んじて居る。

僕は他日この「家」を訪れて來る見知らぬ友たちの爲に、此處に小さな鍵の一つを残して置かう。

「家」一巻の中に見出し得る最も大きな特長の一つは、彼の詩が彼自身の手の様に、彼を生かして居る力の、直接的な、肉身を持てる表現である點に存する。云ひかへれば、彼の詩が彼の前にある海青色の「一枝の薔薇」の様に、最も Visible な姿相に於て最も Invisible な内容を、そのみが恰も

唯一の表現であるかのやうに、表現して居る點に存する。
私は考へる。

彼の人格の意識的な側面と無意識的な側面とが相搏つて發する所の火華
がやがて彼の人格そのものを赤熱する時、恰も幼子の確く握つた掌から花
辨の様な指の隙間を通してこぼれ出る砂の様に、彼の手をほとばしり出る
ものが彼の詩ではないであらうか。

千九百二十二年七月二十九日於青櫛巷

熊 田 精 華

樹

いよいよ私達が住み馴れか下谷の根岸の家から大森の木原山の家へと引
移るやうになつたのは七月の月始めだつた。もう四年越に住むまでになつ
て居た閑静と清寂とに充ちた家ではあつたが、其れが借家であると言ふこ
と、土地一帯の濕潤から來る不愉快さが、家のもの全體の心を残りな
く明るい新宅へ惹かせて仕舞つて居た。幾臺かの家具を積むだ荷馬車が部
屋々々を虚うつろにして、薄暗いしんとした奥座敷などが、つい先頃さきごころまで青銅の
壺の中に活けてあつた花の匂をなほ幽かに濕しめつた重い空氣のなかに心持よ
く漂はせて居たり、今は幻まぼろしとしてのみ眼に映うつる家具の群がなほ鮮やかに舊むかし
の位置に落ちついて居て和やほかく鈍い午さがりの日ざしを弾いて居たりする
やうに思はれる時ですら、只淡い愛惜の念が薄い雲の切れはじめのやうに輕
く心をかすめ曇らすばかりであつた。家のものゝ心はみな明るかつた。住
み馴れた家に對する離愁からみな遠くはなれて居た。

引移つた日は曇り日だつた。例年よりも遅く來た梅雨が未だ降り止まず、

時折ふと灰色の雲間から色の澄むだ濃い蒼穹を細長く覗かせては直ぐ小雨で其れを包ひ隠すのであつた。雨の降らぬうちにと病身の私は家のものより先きに車に乗つて院線の萬世橋驛へ向つた。併し其れは私の父に對する口實を含むてゐた。私の病態は四月以來病床に就いて六月の半ば頃にやうやく籐椅子に座ることを醫師に許されるやうな具合だつたので、この轉居の日に密かに訪れることを除いては到底本屋を訪れる機會が當分の間私に與へられさうもなかつたからである。

上野の森を過ぎる時にも、廣小路を行く時にも、昌平橋からあの錦繪間屋のある町を走らせる時にも、うす暗い室内の調度のみに見馴れて居た私の眼は、灰色の空に壓されて何んとなく憂鬱げに見へる樹立や川や町々の家並びをさへ爽かに明るくかつ懐しく眺め返すのであつた。其れほど外の空氣に觸れることは私の心と身とを輕やかに浮き立たせた。佛蘭西書院、東京堂、三才社と順次に車の梶をふるさせた後、懐しい本の匂と色とをな

ほ身のめぐりに漂はせながら萬世橋驛へと向ふ頃、小雨が霧のやうに幌をかけて居ない車の上の私を濡らし始めた。しかし其れは直ちに降りやむで、大森驛に着いたときには雨雲の間から鈍い日ざしが一すじ二すじ洩れ射して居た。

竹塀を圍らした新宅は八景園の切通しの坂を登ると直ぐ路の左側にあつた。瓦屋根のある門を潜ると左右から柵の古木と赤松とが私を迎へた。正面には中庭に通づる技折戸があつて其の上に赤松と、ちの樹とが聳えて居た。技折戸の竹格子の窓のあいだからは寒竹の黄緑色の葉が見へる。如何にも風雅な、閑寂な家の様子が先づ私の心を捉へた。玄關は踏石の盡きた右手に在つた。呼鈴を押すと二三日前から來て居る女中が硝子戸を開けて呉れた。

ひと先づ家の中をあちこちと歩るき廻つたのち、中庭に面して居る十疊の茶の間で茶を啜つた。明るい乍し弱い日ざしが椽側の半ばを濡らして居

る。直ぐそのさきに眼を向けると深緑の軟い苔に所々被れて居る庭士の濕つた匂が幽かに立ち上がる。視線が石につかへて跳ねるところには背低い寒竹の群が重たげに枝頭を傾げて左右に入り亂れて居た。大方連日の雨の重さに耐え兼ねたのであるふ。その黄緑色の蕨葉の惑亂の中にも、ちの老樹が二つ、その強靱な光澤のある濃緑色の蕨葉をひと枝ごとくに平らに擴げて悠然と次第に空へと運び上げて居る。其の寛かにかまへた落ち付いた樹姿が庭全體に穩かな寂のある安息の感じを與へて居た。私は其の銀灰色の節くれだつた幹のあたりに眼を止めたまゝ、暫らく何を思ふともなく心を虚ろにさせた。家のまだ新しい事と明るい事とが空気を爽やかに呼吸させる。軽い疲れを身に覺えて來たので私は片脇をついて身を長く伸した。聽て座蒲團を二つに折つて頭を其れへとのせた。身體中に隈なく行き渉る心地よい疲れは微醉のやうな効果を病身に與へた。私は兩親や妹達の聲と足音とが賑かに玄關口に響くまで其の姿で恍とりと靜かな庭を眺め續けた。

引移つた日の翌日もその翌日も雨が降つた。其の雨が降り止むと孟夏の強い日光が急に凡ゆるものゝ上に白く照り渡り、凡ゆるものが耀かしい蒼穹を反映して陽炎のために絶えず顫へて居る薄い空気に緑が、つた蒼味を帯ばせ、父の居間の椽先から眺める幅の狭い奥庭の背低い生垣の樹々の上すら香のある蒼い霧に揺めいて居るかのやうに想はれる時があつた。遂に眞晝の暑い盛りには雀さへ啼かないやうになつた。暑さは強く私にこたへ始めた。私は立つのも座るのも物憂くなつた。私は毎日午後からは寢る事にした。そして歩みの鈍い夏の晝間を半ば閑を消すために半ば自分の心を爽やかにさすためにあれやこれやと取り止めもない幻想や回憶や希望の中を根氣よく歩き廻つた。乍し其れは徒勞ではなかつた。詩を思ふ念が今迄よりも更らに強く更らに激しく更らに深く心の底から湧き上つて來たのは、一面對世間的交渉が病氣のために薄くなつて自由に空想に耽り得るやうになつたことも其の理由の一つであるが確かに其の幻想其の回憶其の希望の

豊かな刺激に因ることが多かつたと言はなければならぬからである。私はその刺激の中で詩人としての私が持つ徒らに傲やかであつた衿持が打ち摧れ、静かな謙遜が淨められ、情熱の力を押へた理想が穏やかに昂められて行くのを感じた。

丁度六月の半ば頃、醫師に籐椅子にかけの事を許され始めた時分であつた。下谷の家の殊に自分の好きであつた庭の一部に面して居る椽側に籐椅子を置いて、蔭深い庭面が更らに夕を迎へて幽邃の趣きを深めて行くさまにひとり黙と見入ることが何よりも自分の心を和ませたのであつたが、その和みはややもすると重苦しいもの寂しさに置き代られるのであつた。

詩人の生活の最終の瞬間にあつて、もし詩人の全生活内容と其の創作した詩の全部の内容とを楨秤の左右の皿に乗せ得たならば果して左右の皿は平均するであらうか、果して一つの詩の内容が創作當時に詩人が激しく強く感ずるあの自己の人格内容の具象化を確かに生き生きと留保して色凋せ

ないものであらうか。この疑問に對する私の答へはいつも否定的であつた。其の天賦の稟質の量は慮外して詩人としてのみしかの稟質しか持ち得ないやうに考へて居る私は絶へずこの疑問を心の裡に呈出しては寂しむのであつた。心の静かに和む暮方に其れを考へることは別して苦しかつた。病弱の心は屢々其れによつて私の睫毛を濡らした。生きて行く、其れは善い、乍し何故に生きて行くのか、私によつてのみ實現さるべき或物は存在するか。する。何か。詩だ。しかもその詩が私の全生活をゐるべき器でないとか考へられるとき私は苦い絶望を勁い困惑を味はなければならなかつた。私にはどうしても詩の内容と生活の内容との不平均を自分の無氣力な思想の反映からとは考へられなかつた。

其んな時であつた。自分はもう夕闇が濃く迫つて朧げに仄光るひかりさへ葉から落ち去り唯やはらかく黝むだ蒼綠色に身を被ふて居る静かな楓樹の姿に深く深く見入るのであつた。もう小枝は夕闇のなかに融け去つて眼

につかない。やうやく灰褐色に身を闇から浮き立たせて居る幹の姿が私の心を強く惹きつける。其の姿は如何にも素直であつた。伸びやかであつた。其處には憂えがなかつた。哀しみがなかつた。一見すれば如何にも其れは凡庸であり無感覺であつた。其處に行はれてゆく生活は如何にも一律的機械的のものやうであつた。乍し黙つと見詰めれば見詰るほど其の粗い樹皮から發散する慎しい喜び淑やかな耀きが明るく心に感じられて來るのであつた。あの靜かに落ちついて居る樹皮の下には何んなに激しくかつ熾むに人の耳には届かぬ歡聲を擧げながら樹液が、あの四月の半ば頃から五月にかけて赤い芽を角ぐまさせるかと思ふと直ぐ爽やかな新緑の葉として擴げ繁げらせる偉大な力を裡に含むだ樹液が、枝頭の華やかな夢をいや更らに實現させるために生き生きと驅け登つて居ることであるふか。しかも樹はその哀しみと共に其の歡びをも顔に敢て現はさない。樹は微笑をもつて沈黙する。乍し其の若々しい生命の光と力と意志とは自づと樹を取り圍む

大氣の中に滲み出ずには居られない。暗い陰鬱な曇り日の庭でさへ大氣は樹のむれのために軟らめられて、懐しい過ぎし昔の事どもを想ひ返すに應はしい香のある温かさを含むで靜かに澱み、または流れるのであつた。樹の恭順、樹の謙讓、樹は幾度自己の理想に向つて雄々しく己れを建て直し建て崩したことであるふ。樹は決して唸らない。吠やかない。傲やかに自己の業績を語らない。其の根強い耐忍が見詰める私の心の中に深く汲み取られた。私の弛緩しがちな心が其のために引緊られた。重く頭を壓する疑問がまた明日も繰り返へされるのでは在つたが、未解決のままに立ち去つて心が再び明るく和み、未だ明確に意識し得ない理想が丁度季節の變り目のやうに小揺らぎながら先づ心と行ひとを暖め始めるのであつた。私は恍とりと眼を閉ぢる。私はもう何にも考へない。ただ歡ばしげに輕るやかに波立つ胸の幽かな鼓動のリズムに全身を欣しく揺らせるのであつた。樹に靜かに見入る事によつて心を和げることとは大森の家に移つてもなほ

續いて行つた。私の書齋も病室も二階にあるので其處から眺める樹の姿は梢に近い部分、即ち空と樹との形姿に於ての色彩に於ての配合調和が特に面白く感じられる部分であつた。書齋の窓からは中庭のもちの樹が、壘廊下を越えて隣家の庭を見下ろす窓からは椎の樹や蒼梧の樹や背高く黒い枝を擴げて鬱蒼と繁つて居る栗の樹が眺められた。病室は小さな谷に臨み谷の斜面は亭々たる赤松の群に被はれて居た。つねに空を縁に濡らし、また空の青に涵り、風のあるごとに幽かな聲を立てる其の松の樹の群には東邦人として持つ長い傳統から來るところの一種のもの懐しさを除いてもなほ其處には心に安息を與へる何物かが、心を靜かにかつ明るく澄ます何物かがあつた。ことに雨上りの日の其の幹の色の美しさは言ひ表しがたいものがあつた。全體として其れは赤の勝つた赭土色で薄く黝ずむて居る。其處へ蒼綠色の葉が映り鈍い鼠色があつた蒼青色が圓味に沿ふてなほ臙げに白く耀いて居る中央へと兩端から柔らかく廻り上つて明綠色を仄めかす。乍

も地色は澁い赭土色である。濃いやうで居て淡い色の融け合ひは見る眼に無限の色の Nuance を生むて蔭は集り散り濶せるかと思ふと亦生き生きと耀き始めるのであつた。この色彩のもの優しい、どちらかと言へば寂しみを含んだ Movement は殊に雨齋の後にも空が猶どんよりと曇つて居るときその効果を著しく増すのであつた。其んな時私の心は自づと恒照即恒動恒靜と言つたあの王陽明の靜かな心に通ふのであつた。

私は毎日異つた樹々を眺めるために籐椅子の位置を變へた。樹姿はひとつの感情である。季節のみならず天候によつて著しく Nuance をさせられる物優しい感情である。人は栗の樹ともちの樹とを見較べて其處に激しい感情の相異を感じるのである。一つは淫逸的であり一つは克己的である。しかし其れは單なる慨言に過ぎない。日の射す位置の變るがままに一方が暗鬱な表情を取ることもありまた一方が情熱に身を燃やすこともある。この樹自身のもつ感情に其れを眺める人の氣分が反映するとき其處には微妙な

極めて複雑した感情の搖曳がある。人は省察する。省察することは見つめる事であつて未だ象をなさないものが自づと象をとり、流れるものが遠く遠く流れてゆくのを杳かに見送るのが省察のころである。耀く葉、閃く葉、揺れる葉、光る風、沈む大空、湧き上がる白い雲……。

私は例の取り止めもない幻想と回憶と希望とのなかに自分の思想とも言ふべきものを練ると共に樹を眺めることに因つて得る和らぎから自づと湧き上つて来る静かな力を味ひ始めた。私は次第に心の動搖を覺えなくなつた。平穩な安息に充ちた心の中へは詩の影が重く降りて來た。其れは熱意に充ちて居て温かく私の鼓動を昂めた。私から夢が去つた。然して更らに新しい夢が私へ來た。前の夢は瞬間的な感情と情緒と氣分との集積から生れる Ephemère なものに過ぎなかつたが後の夢は人格に根差し人生を通じて現れる所の Permanent なものであつた。其れは最早私に詩と人生との内容に於ける不平均を考へさせなかつた。否、強く其事を肯定することに依つて

反つて詩人の意義を深め得る事を感じさすのであつた。何故ならば不平均は結局詩人の創造力の無限を意味するに外ならないからである。私の心には失敗せる作に因つてのみ進歩すると言つたある佛蘭西の畫家の言葉が懐しく泛び上つて來る。人の夢みる夢が大きければ大きいほど、其の色のままに其の光のままに其の匂のままに客觀化して此れを形象の裡に確保するには、靜かに己れの熟するのを俟つ時を知る心と、絶えざる *Métier* に對する精勵と、身のめぐりのものに就ての怠らざる温い關心とを要する。

私の心に齎らされた夢は強烈な實行を強ふるものでもなく、華やかなものでもなく、また悲哀に充ちたものでもなかつた。其處には穩やかな温い生命が慎しく輝いて居た。其處には一步進むごとにより深い光の存在を暗示すると共にまたより闊い世界、形象を求めつゝあるものに充ちた無限の世界を暗示する何物かがあつた。凡てが平穩、凡てが溫和、凡てが謙讓であつた。其れは觀照の生活であつた。身をめぐる凡庸なるものを凡庸のま

まに生かして行くこと其れがその夢の本領であつた。従つて私は己れの感受性を絶えず爽やかにし、己れの感受性を何時も新らしくし、己れの思想を恒に潑刺とした状態に置かしなければならなかつた。従つて其の舞臺はこの平凡單調な日常生活でなければならなかつた。友達の口もとの輪廓を温く和らめる親しげな微笑、妹の白い手から涼しく濡れ落ちる夏のひかり、夜、頭を前へ屈めて眼鏡越しに夕刊を眺める温い父の姿を静かにめぐる老年の憩ひと寂しみ……。其れ等は力強く私の心に印銘するとともに、何時知らず其の情緒其の氣分は私の作る詩の上に流れる雲となり、黙する樹となり光る草地となつて形姿こそかはれ、丁度優しい思ひ出が眺める風景のなかに融け、その風景のなかのひとつひとつが眺める人の心もちとなつて輝くやうに、其れらは象づくられてゆく夢の姿の其の遙かな捉えがたい句となつて、光る風のなか、日のひかりの下を薄青く遠く遠く流れるのであつた。

病室の窓枠のなかには幾度か白い夏雲の群が湧き上り、崩れ、棚引き、或は小さな塊りとなつて空の青の中へ融し込まれた。輝く日が限りなく續いて樹の上には軽い疲れが見へ始め、軟い葉を持つ樹には殊に著しく其れが感じられて來た。病弱の私の身體は其の軟い葉を持つ樹と共に日毎重なる倦怠と疲勞とに痛められてその枯れ萎むだかのやうな心の葉をなほ己れを高く支へる意志の小枝のめぐりに臆々と垂らさせるのであつた。激しい暑熱は凡てのものを沈黙させた。沈黙させられるがまゝに反つて光により色により匂ひに因つて私の身の周りのものは微かな呼吸をゆき通はせ、人の眼のやうに密かに疲れたものを扶けあふ勇氣を以つて殆むど無感覺に成りかけて居る私の感受性を優しく愛撫するのであつた。私は幾度か何時知らず身を涵す夕のうす闇のなかに立ち上り眼を廻らせ、或は早や蔭にかくれ或はなほ和かい光を反映して居る其等のものに感謝の念を罩めて、そのひとつひとつに頷くのであつた。室内を静かな歡びに充ちて歩るさめ

ぐるのであつた。

やふやく待ち憧れて居た秋が私達を訪れて來た。隣家の庭の蔭深い西の隅の木の上から一丈許りも垂れさがり夏の中頃から早や華やかなうちにも何んとなく寂しさを湛えて、靜かに集まる夕闇の中にことに清楚な秋の興趣を偲ばせて花咲いて居た。凌宵の花々も二三日ばかり夜ごと激しく庭樹を叩いた初秋の雨に虚しく散り去つて仕舞つた。然してその背後に在つて今迄目立たなかつた錦木のむら葉の赤く色づくのが次第に眼に映つるやうになつて來た。

暑氣は依然として去らなかつた。秋の日光は夏よりも強く凡てのものを照りつけた。乍し樹々を繞る大氣のなかには溢れむ許りの爽やかさがあつた。海から來る風は廣い平野を過るうちに其の鹽分を振ひ落して和かい調子の海軟風となつてただ樹に時折かの搖蕩ひがちな藍青色を齎らすのであつた。風は光り、風は滑る。私は椰子の圓く擴げられた細長い葉のむれの

一つ一つが風を迎へて嬉しげに緻く殆むど白楊の葉のやうに絶えず顛へて居るのを見出した。もちの葉は直立して微風の戯れに頑として應じない。松の樹葉は靜かに頷き、檜葉の樹葉は優しく揺れ返るのであつた。凡ての樹の上には安息があつた。憩ひがあつた。穩かさがあつた。もち、檜、椎なども常盤木の類は新芽をふいてその淺緑の生き生きとした色を明るく日に燦めかすのであつた。寒竹の芽も地を破つて濕つた土のあちこちに、つくねんと身を現はし始めた。大地にうつる物の影の黒みは夏よりも心もち薄らいで來たが、其の代り影は大氣の中に隈なく散つて日溜のめぐりをやゝ黄色味を帯びて繞り漂ふのであつた。

百舌、ひは、四十雀などの小鳥の聲が聞き馴れた雀の囀りに交つて病室の上に落ちて來た。窓から見下ろすとよく奥庭の水盤の石のほとりを四十雀があつた。黒と白との優しいしかし強い色の取り合せを、あすなるふの樹葉の濃緑色の反映に柔らめられて靜かに虫を啄むで居る姿を見かけることが

あつた。私はやうやく夏の苦患と倦怠とが心身から薄らぎ始めるのを覺えた。私は軽るやかに緩るやかに呼吸しながら寛たりと籐椅子に身を落として久濶りに讀書しはじめるやうになつた。未熟な佛蘭西語に對する私の智識と精神の疲れとは同じ單語を幾度となく字書から引かせるのであつたが其れでも愉快であつた。私は幾月ぶりかで温いやや *jeunes* な佛蘭西の小説に接し得たのであつた。私の心は明るくなつた。徐ろに輝きはじめた。私を除いて人ひとり居ぬ二階の部屋部屋には空の青と樹々の緑に蔭づけられた黄色い秋の空氣が朝から夕まで靜かにめぐり流れて、時折激しい小鳥の聲に揺めいては家具の上に澱むで居る光のむれを亂すのであつた。私の軽い咳き、私の籐椅子から身を起すときの微かな響、片脰をつく時の籐椅子のきしみすら鋭い反響をこの室内に起すかのやうに思はれるのであつた。この靜けさの中に私は間々本を支へる手の疲れを休ませるために本をひざの上に伏せては恍とりと眼を閉じて温く呼吸するのであつた。九月もその

半ばを過ぎやうとする頃であつたか、何時もの通り讀み疲れた眼を閉ぢて靜かに呼吸して居ると、ふと芬と樹の花の匂が私の顔を打つのを感じた。其れは眼をあけると消へ、眼を閉ぢると再び和らかく匂ふのであつた。しかし日脚の短い秋の暮ちかくだつたので匂は直ぐと冷たい蒼い空氣の中に融けて後には微かに檜葉の葉の香りのみが、直ぐ窓先に其の樹姿を眺め得るせい、夕闇の増すまゝに流れ漂ふのであつた。翌日は朝からそのうす甘い樹の花の匂は室内を充たし始めてもう眼を開いて居ても決して其れは逃げなかつた。私はその樹の花の匂ひに被ひ包まれながら愉しく書を讀み親しい友への書信を認めた。樹の花の匂は其れからは毎日のやうに、秋の日ざしの續くがまゝに或ひは昂まり或ひは低まりながら部屋のなかを明るく暖く日のひかりと共に照らして行くのであつた。私はある蒸暑い午後の日ざかりにそれが權の花の匂であることを始めて知つた。私の家を取り圍む隣家の庭々は殆むど常緑樹ばかりで埋られ其れらしい花の咲く樹を見出

し得ないことがこの發見を遅らせた理由である。其れは確かに遙かな庭から匂つて來るにちがひなかつた。でなければあの強烈な槿の花の匂がこの絶えず顛へがちな傷みやすい病弱な心のほとりをかほど優しく、和らかに繞り得ることは在り得ないのである。遙かな庭からの樹の花の匂――。

其れは温い聯想を以つて私の若々しい微笑を洩らさすのに充分であつた。

人の肉體に強い刺激を與へぬ季節は立ち易い。其れを感じる事は久しぶりに會ふひとの子供の意外な成長に驚くときの心持のやうに何時知らず慮外に置かれたものを不圖偶然の機會から意識することなのである。私は秋の更けるのを屋根瓦をしつとり濡らして日に燦めかす朝霜のより具合で其れと知るやうになつた。華奢な姿を庭樹の上に見せて居た子雀たちも、うこの頃は太く肥つて親雀と見さかひがつかぬ様になり、小松の枝がその重さに軽く撓むやうになつた。南天の實がやふやく赤く色づき、庭隅に今迄忘れられて居た山茶花と柗とが其の開花によつて思ひ返へされた。鈴蘭

の花のやうな柗の花は私に珍らしかつた。あの堅い葉を持ち赤い實を持つ柗がかやうな優しい花ぶさを持つとは思ひもよらぬ事であつた。乍しその薄甘い花の匂は樹の花らしく刺激性に富んで居た。

空はもうあの秋のさ中のやうな濃い澄むだ藍青色を示さなかつた。善く晴れた日でさへやや黝むだ水色がその表面を被ひ、漂ふ雲さへその輝きを失つて朧げな眞珠色を帯びる許りであつた。其のために庭樹も芝生も置石もみな強い鋭い輪廓を失つて、灰ばむだ、どことなく物哀しい、落ついた氣分となつて四周にめぐりただよふのであつた。

庭下駄を突っかけ奥庭の木戸を開いて裏の明地へ出て見ると菊の花が今を盛りと咲いて居てかよはい私を眩暈させるやうな烈しい香りを大氣のなかに充たして居た。その背後に丈高い葉鶏頭の群の大部分は或は虫ばまれ、或ひは凋れ萎むで一時の輝しい趣きは全つかり無くなつて居た。下男の丹精になる小さな畑を過つて草地へと出る。菊科の雜草と栗樹と櫻樹とを雜

然と植込むである明地の隅とを除いてあたりの雑草はみな黄色く枯れて踏
み行くままに丁度獸の背でも撫ぜるやうに生温い草の熱れが足先を妙にく
すぐりながら立ち昇るのであつた。松の木蔭は冷え冷えとしてやや肌寒か
つた。私はもう眼近に迫つて來て居る冬の到來をしみじみと感じない譯に
はゆかなかつた。下谷からこの大森へ移つて早や三ヶ月にもなる。しかし
病勢は依然として變らないのである。いや果して癒るか癒らぬかが疑問な
のである。けれど私の心配と憂慮とはもふ死から去つて居た。詩人として
何等かの業積を残したいと言ふ野心も私から去つて居た。ただ日々の詩人
としての努力そのみが願はしかつた。このNovateurは毎日何物かを見出し
て行くと批評された Renoir の態度が切に望ましかつた。死ぬまで續くかも
知れないこの病者の生活の單調さをば生かして其れを詩を生む心にまで昂
め得るものは唯此の絶えざる努力とこの熱い希願とのみである。私は寂し
くない。決して寂しくない。私は私の意志の力を驗す欣しい機會を持つて

居るのだ。私は靜かに心を澄ませ憩はせ亦いそしませて日常生活に就い
ての繊細な、極めて周到な關心から絶えず何かを汲み出だして行かな
ければならないのだ。私は軽く松の樹の背を叩き亦緩やかに其の荒い樹皮
を撫でた。此れからも樹によつて季節の推移を知り、また季節によつて樹
姿の變化を悟りかくて自然に對する私の感受性はたえず豊けさを増して暖
く輝いてゆくことであるふ。私は懐しく自分の手の觸れて居るあたりの澁
い赤褐色に眼を注いだ。近くで見ると著しく黒い班點が眼につく。が、私
は反つて其れによつて病室から眺める時とは異つた親しみと友情とを何ん
となく覚えるのであつた。私は希望に充ちた暖い微笑を洩らしながら暫ら
く軽い興奮を感じて其のあたりを靜かに歩き廻るのであつた。

後記

一、詩集「樹」は、はじめ詩集「家」と題し、千九百二十二年七月詩集「正午の果實」以後の詩章を聚めたるものを、故人自ら十一月二十三日夜若くは二十四日午前に於て改題し且七月以降の制作にかゝる「石」の一章を加へたるものなり。

一、詩集「家」には巻頭に「碑銘」を載せたれども詩集「樹」に於ては是を「水」の章に置きり。されど今、はからずも遺稿として詩集「樹」を上梓するに當り故人の筆跡を版に移して是を巻頭に收めたるは編纂者のさかしらなり。或は故人もまた咎むる事なからんか。

一、跋文はもと詩集「家」に附せるものなれど詩集「樹」に猶存したれば是をとどむ。

一、故人慣用の假名使ひ及び語法等は故人が本來の面目をさながらに保存せんがため正格の文典等に據りて改訂する事なくまつたく是を存置したり。

一、泰西の俗、奥津城に頂を擁ける圓柱を建て以つて天折の意を偶する事あり。表紙にもちひたる圖案は即是を現せるものにて、先に故谷井三平氏の遺稿を上梓せる節故人の考案によりてその表紙を飾れる所のものに據れり。

目次

碑銘

序

水 十四章

出 會

生 活

歡

EX-VOTO

裸 身

Saint Francis

河口湖

外

業

Le Souvenir

俯向

萱

水訪

待訪

女
四章

序詞 (La Camargo)

進航

帆船

La Nascita di Venese

I 序詩 (女の群の唄へる)

II ヴェヌスの生誕

客
四章

客

荷風全集

夾竹桃

風

樹
七章

婚姻

交

石

十五草

期 待
意 途
樹
認 識 の 時
境 遇

陶淵明

楓 樹

榧

蘭の日曜日

布袋和尚

離 愁

終に臨むで

暖き諦念

松 樹

詩人のうた

母

見ること

畫堂にて

死への想ひ

日夏耿之介氏に

跋

後 記

EN
NAGA

畢

EN
NAGA

ENZANDŌ
NAGAHARA-ŌMORI



3